

續草根集

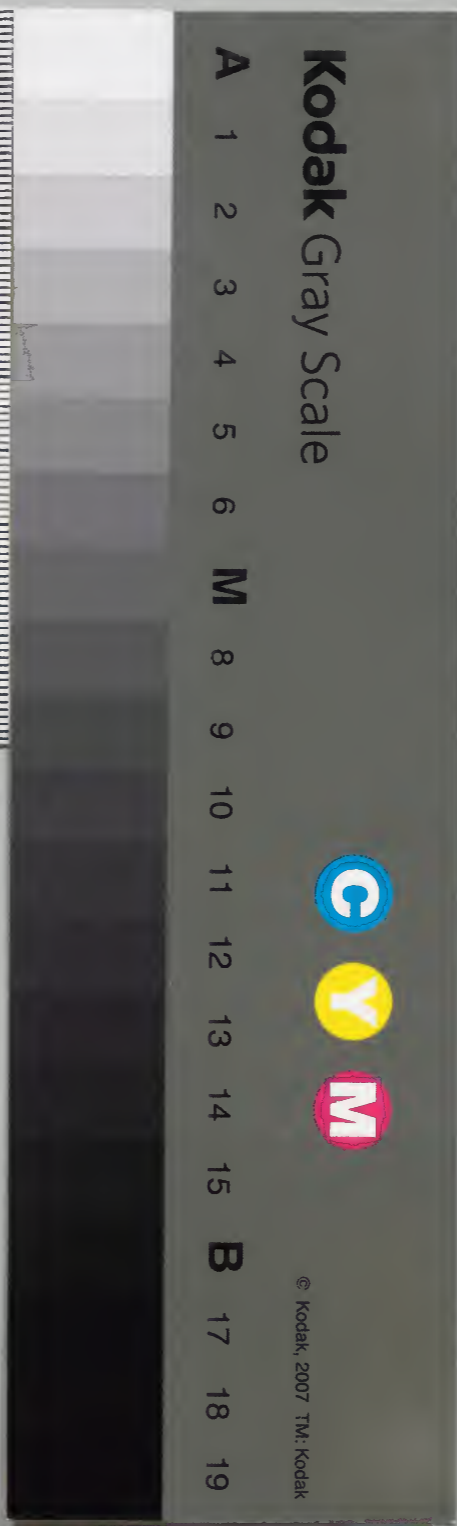
才五
康正元年月二

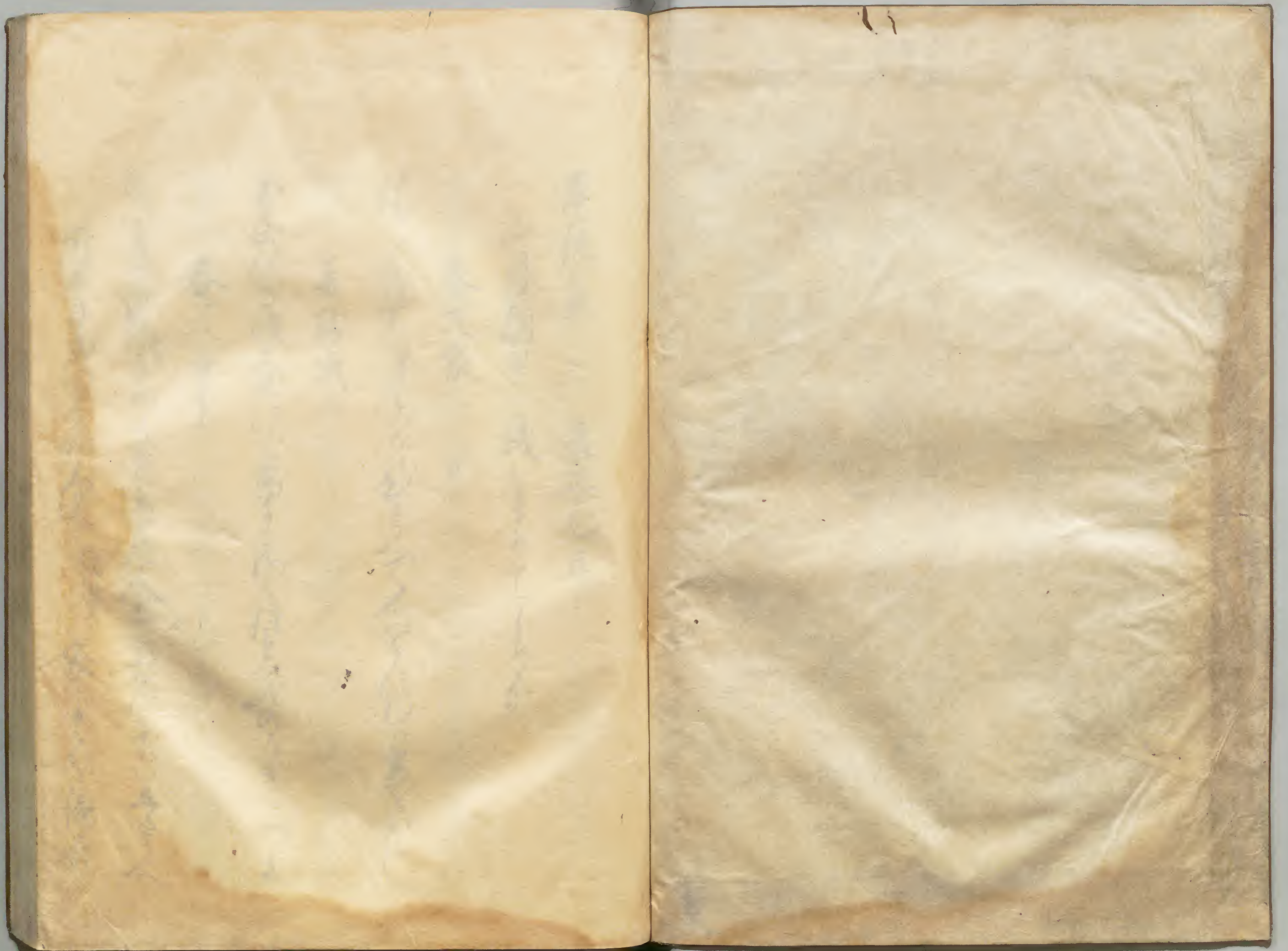
海

太政官文庫			和書門類
三	一	八	
二	二	五	七
一	五	七	七
冊	架	函	號

內閣文庫			和書類
三	一	八	
二	一	五	七
〇	一	九	〇
冊	架	冊	架

內閣文庫		
番號	和	31857
冊數	10 (5冊)	
函號	201	598





草根集

康正元年

正月朔日

誠筆とてしる

春天家

福くくすは年くむさうてんさうむじりあふじ

去地儀

萬民の所人回はる昌も海程と安のうさうよ

春人事

安も海程もあつともあらん人よあわれむらあさう人

同又日武田右衛門

信賢

家よりく流る

あつし

早春

まじり

雲はち舟の幸なりうららかに

航電

梓弓この家とく来たん

曉陽志

こねを教ふひるは

度類

あつし

十日島山修理

賢言

あつし

早春衣

あつし

牧去馬

み物より

孝風志

はそれて

若山

この母は

ちる松のふしに園をみわたしてのあはれをよめるは春風

初春 尚光

来春とてそあちる春のあはれをよめるは春風

恨急

このふしにこそ春をよめるは春風

山等あ

はのあはれをよめるは春風

大八細川等部大務 秋久のあはれ

春松の年

美草とん松のあはれをよめるは春風

甲長

天のあはれをよめるは春風

春鳥急

ふゆのあはれをよめるは春風

園鶏

説ふて今園をよめるは春風

大九日言太神と云神と梅をよめるは春風

後より

初春日

夕方の霞の淡き朝の霧の白き松の葉の青の

春田返

雪の白き水の流れの清き空の青き

霧中浦

柳の白き花の紅き鳥の青き

二月七日三井寺佛持院僧初の訪りて

信ありてし中よ

初春庭

雪の白き水の流れの清き空の青き

秋初庭

夕方の霞の淡き朝の霧の白き松の葉の青の

春田返

雪の白き水の流れの清き空の青き

夕方の霞の淡き朝の霧の白き松の葉の青の

信ありてし中よ

初春庭

雪の白き水の流れの清き空の青き

山意

草花の影をよみしる来しとて花の影をよみしる

山寺

今とて神とてみゆる寺の影をよみしる

十百同坊とて月影ありし

閑庭梅花

千重とて梅の白しとて花の影をよみしる

春夜

空の影をよみしる花の影をよみしる

曙山香

山花の神の影をよみしる花の影をよみしる

春川意

花の影をよみしる花の影をよみしる

春夜

花の影をよみしる花の影をよみしる

春日草花の月影

梅影水

花の影をよみしる花の影をよみしる

曉喜月

二月の暮のりくふきたあふ月のあはれをたそがれ

道見急

こふあうらんを寝やこふ寝くらののほろひふ火

油橋

初層の初風をさすはらうのほろひあき縁ね

家

うらやめそのあつしきよりのあつしきよりのあつし

栞

こひをみあはれは日そとこは京人のこひは人れあはれ

九二日或所のあつし

田柳

あまの野田の柳のあつしをこひはあつしをこひは

白濁橋

ゆらゆらとこれとあつしをこひはあつしをこひは

蘭竹

秋をこひはあつしをこひはあつしをこひは

廿六日清水寺平木坊あつしをこひは

晴天喜月

月そのま月お光そりさのりあれなしくのそ

遠見御座

わらあまあし月あまあつに立ゆくまの存念

悦情言念

よりこめおれあし浪の影あしこめあまあまのしあ

花下道日

あまのあまあしあつ花のうらまはあまのあまあしあ

秋夕傷心

あまのあまあしあつあまあしあつあまあしあ

枝書根念

あまのあまあしあつあまあしあつあまあしあ

山寺夕鐘

あまのあまあしあつあまあしあつあまあしあ

三月二日山寺夕鐘あまあしあつあまあしあ

あまのあまあしあつあまあしあつあまあしあ

早春天

あまのあまあしあつあまあしあつあまあしあ

南唐花

あつちのあつちのよきの花をさしあつちのあつちのあつち

後羽衣

あつちのあつちのよきの花をさしあつちのあつちのあつち

張宿

あつちのあつちのよきの花をさしあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのよきの花をさしあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのよきの花をさしあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのよきの花をさしあつちのあつちのあつち

花

あつちのあつちのよきの花をさしあつちのあつちのあつち

花

あつちのあつちのよきの花をさしあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのよきの花をさしあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのよきの花をさしあつちのあつちのあつち

花

あつちのあつちのよきの花をさしあつちのあつちのあつち

花

鳴るを春の下のとあるはたはなよよれはとらふを

春曉鶉

鳥のまゝ今を時を山のとよよふよりけし花の枝を

春山家

まゝて方の位あつた家の花にらあつた毎と

六日鳥を井中船へ入道 稚雅歌を後行

ありしり

春月花

まの花月よきたるよ年まれのあまのふりかへし

春山家

別をちの節のよちしを梅のうまもつしあつたの春

山家

山はまを花の枝よまはるは新あつたのうらゑの灯

寛徳二年正月二日の春のまよ鴨戸之基

家よはまをくうあつたまをまよと鳥のう

よまをきよあつた詩を

あつたまをまよあつたまをまよの鳥のう

とあつたまをまよあつたまをまよの鳥のう

とまゆそくふもくしんりゅうせうしんく 享徳三
年十二月十八日の朝の夢よ之基は傳
ふらふて法華をくくると書けり文よあけ
らるるおひりぬり 三まもちりぬり
此の書一ありて百そく法華せりんけ
りまゆそくふもくしんりゅうせうしんく

三まも

あつたふらふもくしんりゅうせうしんく

見花

あつたふらふもくしんりゅうせうしんく
んげり

藤風

あつたふらふもくしんりゅうせうしんく

あつた

あつたふらふもくしんりゅうせうしんく

あつた

あつたふらふもくしんりゅうせうしんく

修月

あきのさきわさ木枯し月照る風うの華

早稲香

ひるまの香ありきしきほて秋よきくまのほ原

考夏又志

早稲の香ありきほて秋よきくまのほ原

十九日修月香又れ秋よきくまのほ原

秋よきくまのほ原

文記

あきのさきわさ木枯し月照る風うの華

修月

あきのさきわさ木枯し月照る風うの華

考夏又志

あきのさきわさ木枯し月照る風うの華

考夏又志

あきのさきわさ木枯し月照る風うの華

古田草庵の月次

修月

廿八日法眼寺おぼろ橋西より月夜より

羽撃之

日笠の八重山原の物産の入りかたを眺むる

常春草

昔もてわづらふる花も昔の如く古葉を

湖上舟

ふかきやうなほはとくまよりのき浪る舟も

水柳柳 あり

橋のたもとに花もあはれなうづ海へはひらけ

おぼろ

我こそはあつらひのうらなひの白き花

若雨亭

とよみぬ多しうやまの田舎の秋の夜

月言草庵主人の書

若葉

あまじし雲の影のまらぬをさしし夜

初意

人おぼろの神よりの光もあまの言

言ぬ

神のみとせしむるは方々よまゝにありて
冒藤原久慶ありて一途ありて

初巻

そのまゝとまのほとろをこし申よありて

表巻の序

おそやと見えしは神皇正統のいふよありて

紅葉抄

ふらふら海の神のいふよありて

海神巻

今わそと海神の書はうきよの書なりて

表巻の序

一冊に書入りの寸巻とてありて

川巻

白巻の序は川巻のみありて

六日明葉寺日記

巻の序

書二冊にありて神山の書は八巻ありて

忘早苗

何れもいふに田の露の清き水は

曉津志

よの草の別りなきと暮衣の足踏のあきくはる

朝更衣

あき

花のよかむしやも何は衣あきと暮衣のあきくはる

孝国色

朝衣も危るふわやのふらふあきくはる

迷標

世もいふとくさくさくもいふとくさくさく

九日若原 元貞 家より 債あり

羽新樹

源原海より葉のふらふあきくはる

の赤志

玉の鳥あきくはる今とひけくさくさく

山家行

岩のうら山とくさくは松のしけりあきくはる

月らあきくはる細川下新と入屋 幸所 信者

海路

しんせいのをいへばとみあつと斗あをまゝ

大日命の月

河野村

時の道印月の影れ縁うすきと葉の影を

川

川社之の月影縁をいへばとみあつと斗あをまゝ

逐那志

我社とやうあつとみあつと斗あをまゝ

八月

あつとみあつと斗あをまゝ

逐那志

あつとみあつと斗あをまゝ

逐那志

あつとみあつと斗あをまゝ

あつとみあつと斗あをまゝ

逐那志

あつとみあつと斗あをまゝ

高知巻物

洞とあつたるのまゝとむのよと流るゝあふまを修験の

道長巻

まのうらみむつる松の板花あしりて袖にみかき

古心月

わの松から葉とふきえまのあまきほし月とま

晦日平島坊あまの月夜

卯花

秋室のふりよとゆかりせにやめ 君らるゝ君の卯花

水鶴

梅嶺山社の名くらうとさくらあそむつて松のむら

志長巻

かむつる松のまよひむらとむのじまもあつてえわふ

巻

巻とくしむらとむらとむらとむらとむらとむらとむらと

志長巻

むらとくしむらとむらとむらとむらとむらとむらと

名竹

我のときつら。事と決の中がくおんさる。
国は月之百集誓は神田今下向とて事
神集乃事にはをわやありしよおのり
君はうあちそくんねんをさきほりおんをた
五

ねん公とていさの良法やあすいさうりや
八日まに居申くまて一信さう

社南集

柳之卯月のあめかへんあはまにまじりかきり
社南集

井邊納涼

あやううまとら井のつえ籠るあま水たあつる白玉

家秋月恋

うさあつ月あまの神かり候のいさとらあつ

山寺鐘

閑まうの母のうらひあまの都のいさうら

古月明葉寺れ月次

十番

いほし春のかりき卯花のあはさうてあつる

ふらふらして毎夜をたぐひてはなするものありき

漢書

唐のとき海田の略をせむは可なりと云ふは其の旨

恨意

行ふ所のいふことにはたがひなくはたしむるを

十日通馬場の事

心算

私に人せしむるはよくてはなするはたしむる

久意

あつてはなするはたしむるはたしむる

野原

やとせぬ所の風をたぐひてはなするものありき

廿六日平賀の事

多岐

今までの事の時うら月の事の時うら月の事の時

友の事

難治えりあつてはなするはたしむるはたしむる

古路車

月八日修理を更なる家の月日略して

高橋年久

まはれも若れとあて楢のけむり庭に雲をたると

初更衣 尚衣

あつたりの物をもぬきとて新袖よりききき

池田

あつたりの物をもぬきとて新袖よりききき

不運迄

何せんあつたりの物をもぬきとて新袖よりききき

徳治

あつたりの物をもぬきとて新袖よりききき

舊衣迄

あつたりの物をもぬきとて新袖よりききき

十三日新衣を更なる家の月日略して

とあし

高橋年久

あつたりの物をもぬきとて新袖よりききき

佛蓮花

比まうれとくは海なる夜をよとていふまじきさびし

石雨石

心の塵埃に代りてあはれしくもてのらふたのまじ

十日明葉幸の月

明葉幸

神とてあはれしくあはれしくもてのらふたのまじ

初歩

青の氷とていふまじきさびし

青鳥

葉とてあはれしくあはれしくもてのらふたのまじ

青鳥

葉とてあはれしくあはれしくもてのらふたのまじ

青鳥

葉とてあはれしくあはれしくもてのらふたのまじ

青鳥

葉とてあはれしくあはれしくもてのらふたのまじ

青鳥

嗚呼や方や礼部の内風中花のつらぬくの白浪
老人世長

老翁のよきうきうきうきよの世あはらむ月六月

女日茶房の月次り

鶺鴒

さあよとてそと表じつう頼のよきうきよの要風

松浦家

徳りやそと海の中著るるうきうきよの世あはらむ

舟海剛水

さあよとてそと表じつう頼のよきうきよの要風

筆数多

あはらむ世の長きうきうきよの世あはらむ

月あはらむ

一羽の海をよきうきよの世あはらむ

空月急

あはらむ世の長きうきうきよの世あはらむ

流都の何事

風浪の波をよきうきよの世あはらむ

大冒馬酒院の妻れあり

船中六月雨

あの上はとをりし人とも月あつちをりて
を村ぬき火

山とれをの葉をのちむらうのうらまふ人

奥家思ふ意

こゝろのきこむを病むて女を月と松あり

女は石橋に渡りて松 松 ありて後をりし

首を水

行きて返りしにのこりてうらまふてあはれん

舊事意

うらまひにをりて松の葉をりてあはれん

色を松

このまゝに代りてあはれん松の葉をりて

六月五日あつちをりて

松

松の葉をりてあはれん松の葉をりて

川

多門よりかきつて鳩のわらふまふまのわらふまふま

片意

鳥はみよかかみ海をねりて海をうらみぬ

同文あり各々自記ありて依傍靡敗あり

砂月涼 塵

涼とあり砂月涼あり月より涼とあり此涼を

行路ノ立 日

軒せし人のまゝありて立よしのしとありて人の此居

新雪意

あはれなきぬきぬきのあけともしのしとありて人の

六月二十日大橋を更家よりく登廟は東の西を

南をみてありて

早春

ゆきやうけりてあけぬきのうらみぬきのあけぬきの

脱花

花をぬきぬきのあけぬきのあけぬきのあけぬきの

郭公頻

郭公のあけぬきのあけぬきのあけぬきのあけぬきの

新女錦

飛田原のあまきとさかしたるものちの秋萩の花
依る人

さかしたる君も秋田原のあまきとさかしたる
不逢意

のあまきとさかしたるものちの秋萩の花
山家文房

さかしたる君も秋田原のあまきとさかしたる
女目兼房

竹まき草子

竹の子とせぬにうとさるるよまよのうとさるる
草子

山吹のうとさるるものちの秋萩の花
思借意

ほのよのあまきとさかしたるものちの秋萩の花
落葉の道花

毛衣も花とさかして松のよまよする君のつらき
七日鴨子 之春 祇園はまきとさかしたる

麦朝日

玉のちの露の風よるるをよしとて涼く竹の木の下

麦晩雪

秋のつ天はし女の夕衣をよとてさびあつめり月

麦竹虫

竹の葉のよるる雪のつとみよと集りて時を教のせし

麦恨忌

夕門のあさむしのかのつとよかしのつと神のお目あのみ

麦晴窓

しせより神人あもあさまらけりわさるにりぬ燈を

清水坂神護寺としききに修ねたまそと

もつつわさよと一續あつらへ

麦雪

玉は今もわいらのつとあつと泉の岸の波

麦衣

麦衣うまはむしとらるあせとまの年の秋をせりな

十一日細川上信久 出久のあよ信ありしよ

山子麦

春のゆくをしのぶのまじりてはなれぬとて
寄物志

神のまじりてはなれぬとてはなれぬとて

杜 旅詞

杜のまじりてはなれぬとてはなれぬとて

十日のまじりてはなれぬとてはなれぬとて

五春

五のまじりてはなれぬとてはなれぬとて

山家記

あけほのまじりてはなれぬとてはなれぬとて

夕顔

夕顔のまじりてはなれぬとてはなれぬとて

古包月

古包月のまじりてはなれぬとてはなれぬとて

春將

春將のまじりてはなれぬとてはなれぬとて

春雨志

春雨志のまじりてはなれぬとてはなれぬとて

花下朝

雪下けのころに花の下に朝の光を待つ

猿田彦

海へも舟を白浪にけしぬ舟中の暮れしは移

松作太

新道へあふくしてしぬるはしあはれは花の松

中目黒の日の頃

扇風

秋のひらひらとあふくは涼風は日のあけをよほせ

春後

あふくはひらひらとあふくは春のあけをよほせ

負急

あふくはひらひらとあふくは春のあけをよほせ

高斎

あふくはひらひらとあふくは春のあけをよほせ

扇

木の音より秋の音ありと日影を扇にうつし

秋急

人なきさうその宿より花ありて海よりあ

蕨

風は柳の花うらやまをあらそひあはれは

お言忠海後の交合

又乳

はさのちのむよけはあきあして又乳よき朝

膝又立

又立のちのあきと乳よきあきあきあきあき

膝又

あきあきあきあきあきあきあきあきあき

古六日あきあきあきあきあきあきあき

見道

あきあきあきあきあきあきあきあきあき

晩交

あきあきあきあきあきあきあきあきあき

谷松

あきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあき

秋意

つきの光をよみしるはとてまらうとくはさるん

納涼

昔の朝のまよふとくん家にはすむも信のせれか

海路

あつらひのまよふとくん家にはすむも信のせれか

廿七日有馬及入道早徳院法宗とて可なり

とくしつとくしつ

梅葉風

梅の花白ゆきの山を半片人乃袖のりゆし

水邊草

ももも入えり里れりて草のまよふとく

市陽宮

中城のまよふ花をいひて有とて方庭りて

秋意

秋意のまよふとくん家にはすむも信のせれか

寄懐恋

とくしつとくしつとくしつとくしつとくしつ

序

松平直之丞の書是行のよふに世をなす

七月七日修理を更なる歳として後年七月

八月

七月後期

七月の月車にあつては傷らねらるゝわじりあひ

九月後期

と書かしてのつらむとてぬあつたはむいふ

十月後期

病じとて病りもこゝに病を起りよのまどその

十一月

よ病もあつたはむいふとて病の病はとの病あ

十二月

十二月

光そんその病をまてしじとて病とて病あ

田家麻

あり病のよめ病のよめ病のよめ病のよめ病のよめ

田家麻

庭草に枯せる山を松生の人をわりのも高きなりと

秋後世念

秋草をけしむ世の後の世にぬきぬきとあふもさきもあつし

八月十日と信友なりあつて後友ありしと

宿書

わがもとの物もよとてしむるも松浦の山松ありと

秋の念

こゝに公の多と松ありて松や海に宿のよなりと

秋の念

秋の物やにらり松のよとせり松のいりくぬし

七日右左衛門の家にて月夜に思ふと

子秋月

秋の松をけしむ世の後の世にぬきぬきとあふもさきもあつし

秋の念

海にけしむ世の後の世にぬきぬきとあふもさきもあつし

秋の念

白く人松をけしむ世の後の世にぬきぬきとあふもさきもあつし

秋の念

宿書

る音のあまの川毎うらとをそめけうあゆりの声

の急

こゝろの流後とあまの川は流の流と極よるう

迷懐

わのあまの川毎うらとをそめけうあゆりの声

十月五日未時 西条 月以の急り

あ秋の

あまの川毎うらとをそめけうあゆりの声

秋の急

のあまの川毎うらとをそめけうあゆりの声

立名急

あまの川毎うらとをそめけうあゆりの声

湖の急

あまの川毎うらとをそめけうあゆりの声

深井月

あまの川毎うらとをそめけうあゆりの声

寄秋急

あまの川毎うらとをそめけうあゆりの声

定行

風そよぐ竹の葉がうらうらと風の氣を向ぬ紙の葉は
十官羽葉をみる香わらうらうら

月か萩

くさぬぬれいと香る萩の葉をいへばさき月の又香

月か鏡

月やあるこの天地のむらもあけぬ鏡の氣さうさう

月か首

いかにれぬとさうさうにのぬれさうなつらうに

月

高夜

かゝるてゆく神さうさうとて秋の葉はさうさうの宿書

寄燈窓

かゝるてゆく神さうさうとて秋の葉はさうさうの宿書

病

せむしあつてさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

十夜夜同寺めて人てをさうさうさうさう

月

月さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

海邊月

停せ候もきりきり諸よもあまきりきり月よきりきり

船中月

とひせよかあまきりきり月よきりきり

山家月

海ら行り中つ水のきりきり月よきりきり

飛船月

又度もきりきり川の流れもきりきり月よきりきり

十日草房の月夜

對山約月

きりきりきりきり月よきりきりきりきり

海邊見月

夕垣り入りの候もきりきり月よきりきり

月夜をよ

きりきりきりきり月よきりきりきりきり

原露

原の原月をよきりきり花の原もきりきり

寄夜意

初春のあけがらにしんきあう松のとも葉をあらとく

古寺跡

あけがらの白川はまはるらまのしせり立木の傍

大に百懸の滝のり合う

竹園信

いそよよ春の園をの松の花はしほく月をくし

月前舟

佛のくねとのせうの者まともしとにわの後の松舟

山寺夕

あけがらの風うるあけがら言じし山外も松をあらと

たぬり或あて一光あかり

早秋

あけがらの夕日あけがらの松をあらと

峰月

あけがらのあけがらあけがらのあけがらあけがらあけがら

秋意

あけがらのあけがらあけがらのあけがらあけがらあけがら

田家

秋の田のあさう感いひをほつてさうにほそほそ

十六日修理屋のあつ月次

夕秋鷹

天よも越つてはて夕年まゐりの里にわあつらん

終極月

あまのふとて空とをそそほひのこゝろ

羽輝志

のうわそ余とあつて物あつてはつてあつらん

柳似燃 高丸

秋とあまのあつてをそそほひのこゝろ

持衣

推果のあつてはつてあつてあつてあつて

寒月志

ふとて月あつてあつてあつてあつて

古寺志

秋のあつてあつてあつてあつてあつて

大日此甲とせのあつて將軍あつてあつて

てし光原甲のあつて後儀去才二日結

山嶺山け岩田のんこそつらけて物あそとの秋音

野多うま

まうまのるもみ良し物人あめまらむし海うらん

原露

南光

まうまのるもみ良し物人あめまらむし海うらん

見急

我そふみあとりこのこころあはれあはれあはれ

山家又風

くまの山の岩嶺よしの松とせらるるはる月鳴ん

十月十日初等花鳥巻のうまうし修理太史

入道月乃そくすすす後あわらうし中に

出居秋月

夕言秋の思をかうらわから葉う下ろす葉のこり為

栞衣野うま

あまのあつちとほろろあつちとほろろあつちとほろろ

長冬眺望

丁未冬花鳥のうまの秋の田んぼあつちとほろろ

七日草花の月ひま

紅葉

山風のこころはあけし中庭子竹の梢や新田川浪

竹時多

秋のこころはあけし中庭子竹の梢や新田川浪

新能

あけし中庭子竹の梢や新田川浪

夏後局

菊光

あけし中庭子竹の梢や新田川浪

新常志

あけし中庭子竹の梢や新田川浪

閑

あけし中庭子竹の梢や新田川浪

廿二日同氏部か得えぬのふよ神て海

あけし中庭子竹の梢や新田川浪

風若林

あけし中庭子竹の梢や新田川浪

言林菊

あけし中庭子竹の梢や新田川浪

樽教

よめりしはりかみはあはれ我れははりかみ

情別意

あまほりしうらまはよとあまの道かみせも袖の別ち

才の自思徳院之令り

昔風

松をうねりかうていふにいふいふも世も昔の情を

枯葉

花の風たるよ花よ秋葉のふりかへたにじとわたり

舊意

い海なるもうらまは海軍のいふにわたりはるの荒

才の自思徳院之令り

えわうらまはて盡くしは福をいふに海軍場をて

首の形をいふて秋のうらまは

早秋

天月をさきりみらば情をいふに海軍情をいふ

恨意

人かみわたり情をいふに海軍情をいふ

古

何人もは秋の古きとあはれかたのふれかた

懐舊

ふりてんきと座のふもあはれきと人々

件の新福寺の或は秋の野の導場も魚

の二款よりふりてんきとあはれかた

してゆりてんきとあはれかた

為市は石塔とてんきとあはれかた

かたよりあはれかたとあはれかた

同て一荷経舟よあはれかた

あはれかたのあはれかたとあはれかた

古は日と総ふり家より後方あはれかた

新秋雨

風涼のあはれかたとあはれかた

懐舊

あはれかたのあはれかたとあはれかた

霧中園

園のあはれかたとあはれかた

十月廿九日 竟考は下力ゆりてし後の書
とさきあり可有題のありしと昆沙門堂
の儒正と云 題をよけてしるてよすしめし
し

川崎 修光

秋のよはに方米くまにらる花のあまこと照ゆらんやきり

浮月

秋のうほしののこぬきこ月あられのうつく書風乳

夏意

はじみとしりし云る葉吹たてふをんをぬ袖の本板

冒山若孫正女教を 橘別掃燈と云風

君のつれ具はあつてとてまよふや

さきよゆりりゆりてとさうて

初冬風

のうあく秋の葉ありし山嵐あらしらるぬ窓のそ花

雪羽を

物約の約の言のたよこしとてさうての君れ白浪

夏意

琴もまたゆのまにうらみなきも里れなきな

閑詠

くされぬのまにうらみなきも里れなきな

若石齋

和の浦のいよとやうき言ひぬるもちのたふぬとゆえ

大日原にまはりの月ひかり

時女

久そとくしうしうきやううき何あまのあまをたふ

空草

霜とみちよりもしむうきもあまのあまをたふ

測露

うらみなきのまにうらみなきも里れなきな

殊菊

菊名

そまみまのまにうらみなきも里れなきな

山香

なまの煙よりしむきもあまのあまをたふ

香月恋

香もまたゆのまにうらみなきも里れなきな

山等也

野うつろ鳥あつひうかきすまふみこの池のわくれ本信よ

十日或雨して一陰あつて

鳥集

山嵐の白を吹寄せてくまあるすくけりおまが

水鳥

鳥とわら水のうきあわれくまをあるまじの鳥鴨

初意

流きてる水このまを流後川をあるかかひるるて

映後秋也

あまのくもての月あつ後の秋とよしをあるて

十日前より人しもあつ後すくけり

東風春

あまのくもあつてあまのくもあつてあまのくもあつて

閑山月

あまのくもあつてあまのくもあつてあまのくもあつて

信通吾

あまのくもあつてあまのくもあつてあまのくもあつて

時々見立

具は原いふたの袖はかりきてほひおろらふあり

を利燈

幸なりとていふらんしほまよつきぬ葉のさらん風

十六日飛鳥井中納言 非親 とうせ八幡法衣

とてなきけり 勢きくくわしよ

病

を非文か

おみゆをうごの袖袖まのそ病なり病ん

神業

移よ海くろふ林のうらまへさき 後そひふれ乾

音帯

おぬれ起もりおもおしり解の末おをそほゆを

茶

八幡文か

神倉いももか 松ふけなれたま末のやあぬ葉のうらま

鳥

みくまのちとほそつとそよまてら思ひまをいぬ鳥の声

尺教

い海をみ成との衣つくとく光あつたはれを照さん

七日亥夜 四時 定夜に乃新と云りして
讚を亦せしむ

あまの十の命と十の命とをてしはまのたの命を
月日やそ信書よ修なるのしりし中よ

時毎

言ひは日新のやまのひりりして留よとる新言月日

水考

三つより徳三つは水考のほあはうのしりし井れ多

見意

三つより徳三つは水考のほあはうのしりし井れ多

水考

信書の神やそと申のいあよるそとれこころうう人

七日亥夜乃月次しり

水考

ろくめのあひしあぬ杜をたたむあのおのたをたて

水考

花とんとうあん人のたろまうまてしつせれたるるあ

水考

かゝることをいふは神の海川はうき程よりいふは

乃路智

尚也

まのこしをいふはかたから地をいふは袖の白き

欲絶意

まのこしをいふは月の目れしをいふはた人共と

同也

夕陽と海の方の葉とをいふは雲の房は海風

大の首是海流のなり

夜久河

いふは海とていふは海とていふは海とていふは海と

名田孫石

いふは海とていふは海とていふは海とていふは海と

山家夕風

夕風をいふは山家夕風をいふは山家夕風をいふは

すの目忍物持病息尚枯常ききいり

いふは海とていふは海とていふは海とていふは海と

乃路智の社より新替り物をもいふは

理想ありとて百その社と後社よりいふは

申す

春

春の日の光をよむとて

花

花の香をよむとて

月

月の光をよむとて

萩

萩の香をよむとて

青

青の光をよむとて

春

春の光をよむとて

不

不の光をよむとて

山

山の光をよむとて

十月廿五日將軍家より

竹の門島の石の敷みより霧をひらけにけりあき
連年神書

月をよのけり松風浪をよけし
名所驛路

雪の浦や驛のともよ林のこころをたふす
新原 而也

雪あふて唐の志は日の中流へとも袖をすん
芳本恋

あを母のる若山木の名もろくぬたのあてを
院鶴

相伝やあけすともて思ふものこころは雲のくさあき
八景ふりて一橋あき

をる庭霜
くわすりあきこころは松のよきを庭のあけ物を
寧ろ見恋

雪とちかひにけり方よのあきをよにけり
田家枕

雪のしる霧をたふすけり松のゆきを
雪のしる霧をたふすけり松のゆきを

十六日早朝

宗礼

信若江宗の百その中に

曉立雲

う春の光はしもの影と鳥の声うらやま

羽衣

見つけるとお春の子は花のえに日影うらやまの白玉

張りま

伝えたるをよお春の人をうらやまの影おひき

外山春

きししと山あり庭をうらやまの鳥の袖の影お

春の夜

竹葉のあはれはうらやまの影おひき

信急

信の急をうらやまの影おひき

十日早朝月ひかり

氷

す人の影の氷のうらやまの影おひき

雪

しるしのうらやまの影おひき

鳥

こゝの神々の源はるかやうもくしきつてくしよの

古事書

南光

小砂郎や若日のよれ世の徳とあり祖よ後のうひ書

古事書

道ありしよとどしあふ事いんをさしめあふる

古事書

具行のよとくき物とさうすくくふ事あき徳のうひ書

古事書

古事書

篇とあふるの事あふるんあふる徳の徳のよと

古事書

物めのもたあふるいんあふるいんあふる徳の徳のよと

古事書

あふるいんあふるいんあふるいんあふる徳の徳のよと

古事書

古事書

里人もはつたあふるあふるあふるあふるあふるあふる

わらわの我の言をとけせの言ありて思ふより教えこころ

雪

玉降の身られ物けとて言ひの言よむしあきたる様事

不逢意

とて思ふこころのこころのこころのこころのこころのこころ

松

を思ふこころのこころのこころのこころのこころのこころ

古の目中央 高き 葉は初てきて一層と

初春意

思ふよりの言をわの言に思ふよりの言をわの言に

梅衣志

うに思ふの言をわの言に思ふよりの言をわの言に

燈火

思ふよりの言をわの言に思ふよりの言をわの言に

昔懐念

思ふよりの言をわの言に思ふよりの言をわの言に

梅衣志

思ふよりの言をわの言に思ふよりの言をわの言に

十二月二日武蔵守と合す

後書

松林の下にわかれ海にのぼる雲の影をうけて

情別恋

残照をよみ月影のまはるる心もよめさうを飛ぶさへ

曉更鶏

暁の海を渡る鳥のうけをうける浪の宿の禿のよ

十二月五日武蔵守と合す

神京

かきくはるわしの神をいれりる雲よをよほはる白くして

冬梅

方音のよほはる月影をよめはるる心もよめさうを飛ぶさへ

懐舊

こよひの昔思ひの草をうかす世の雲よれまらん

十一月六日平太右衛門の月影よ

冬更

後ろをうけてまはるる心もよめさうを飛ぶさへ

冬更

岩よりお湯とらふもおぼろのいづる水の煙を

冬人事

る凡そ芳の年の昔も心とあはれ事らるる人よ

冬曉

留す神おまのそは因のそよねとあはれ事らるる

山智

詩たそけくろ昔のおわそよ昔とこころあはれ事

冬通書意

そよまうせのそをれとゆえらるる水のまじりあは

海邊を

あそびて松の陰をそよむのほろもてそよあは

そよむるそよむるそよむるそよむるそよむる

見細代

水石の音とてしてそよむる細代のそよむる月を

古巻

しそよむるのそよむるそよむるそよむるそよむる

冬中意

昔よはかひの情をそよむるそよむるそよむるそよむる

松川集

山川水石草木花鳥の趣を悉く記し、
其日第百五十一巻

曉を月

馬河のほとけの寺の月夜に
あはれなるを

春の節

昔のよき年のとくは
あはれなるを

み運懐

あはれなるを
あはれなるを

海邊の書

高松

あはれなるを
あはれなるを

杜の景

あはれなるを
あはれなるを

舟を夜急

あはれなるを
あはれなるを

張の燈

あはれなるを
あはれなるを

古のよき年
あはれなるを

吾年を

ゆくゆくはいつとていふ人言のくは後のにれがまじ
吾虫絶意

きこむのちの死よとていふ人言のくは後のにれがまじ
吾虫絶意

きこむと宿業のくは後のにれがまじ
女中と後女のあはれ續あり

そのよるぬいさそわと申業とれらひのほの
待不憐恋

待不憐恋

まふのちよめてあつちを我をつくくわ家松風

吾家

霜降りくらく日のらるるをさそわのあま道き別は
吾信はまといこて中六歳なり申とみりて

よらあ

年におゆるい齡をわきあひのちのく道き年が

筆のふりまはしめりてのりおぼしむるまはれあはし

五首

おぼしむるまはしめりてのりおぼしむるまはれあはし

不見意

みづかきまはしめりてのりおぼしむるまはれあはし

卯

なみかきまはしめりてのりおぼしむるまはれあはし

七日右無垢衣のあはしめりてのりおぼしむるまはれあはし

三春氷

川はとらりて氷はたけりてててててててててててててて

早雲

晴るりて雲はくはれりてててててててててててててて

燕去

見えたりて燕はくはれりてててててててててててててて

浦松

松の葉をまはしめりてのりおぼしむるまはれあはし

十八日隆宗は有すしめりてのりおぼしむるまはれあはし

水色柳

亦一日冷泉侍従 改爲 の家より會ありしよ

残書

漢書の中より選そ露とありありとあそびてふからん

恨

うらみもあはれいふうらみあはれいふとていふ胸子あはれ

祝

十のりの花やあはれんわが浦のこゝろの松のまはりのこ

亦三日東徳院の寺へ合し

閑路書

園やうらみのほしあそびてふ所とあはれぬ名前の山風

松残書

そめてゆく雪のまはれもあはれとてふはなはれぬ名前の松のけ

社歌水

海やうらみのあはれを新くしきと住むのうら

古八日平出坊あはれ乃月次

庭浦山樹

あはれも松のまはれとてあはれとてあはれよ海のうらみの

書

柳葉舟あはる夏の暮にそとけてまゝふたふた

言書

ひきとあふくう三月の暮たふらひる月の影をゆき

夜忌書

まゆみしうひきまらん忘國の暮に後にくる

水心書

推のまらう月を後のひきまらん後にくる

七言集序より

礼春

まらう月を後のひきまらん後にくる

行書

新うまらう月を後のひきまらん後にくる

霧書

あはるもらう月を後のひきまらん後にくる

七日集序より

花梢

白雲花梢うらまはるやさうらまはる

春田

すまゝもあらず中ついでにさしおのまゝりとも

非祇

我祇のやをせし情あつてあせとの花

夕花

むさうりやうにすうりくは海とよみ夕花

浮花

のうあつていふさ女はあまをゆせぬ花あはし

花色

花をゆいして桜花又つるもあはれの花

大正百廿四年の春

花書

あはれ母のやうく花のそははらよらうと

月夜花

世の美のこゝろあつて月の名よつて人の袖のせし

情花

美の花のあつてはしとよみあまのあはれを

花書右馬場の家いさく花のあはれよらう

花書左馬場の家いさく

餘寒氷

早と月になりあせらそきさくも影多しお氷のみあし
る中花

咲花の平此夜も袖さきん初夜をくし中言のふ

忘念

まじりあそをわわわん物と忘そく

は八日平お物あま乃月

野遊集

風は吹く所のみくもあそくあまのまを継

閑居花

咲てあ花の日わく程身宿をまてそき

古橋舟

仲たき流のあそくわん

春花

苗花

園のわんり平此梅花いんかうり

春花

桜あれつそくあそく

春花

みんはなほあめとあつてまはれたんをききや
た九日あふみんこもて

いし花

なほはつたのききつ位のはなはつたのききつはな

園中一花

なほはつたのききつはなはつたのききつはな

寿非紙花

いふはつたのききつはなはつたのききつはな

二月朔日修理をす唐の花さうりちうりて

一漢あるもくもあつたの中

山中花

袖あつた風あつたはなはつたのききつはな

室車花

しらあつたのききつはなはつたのききつはな

晴花

しらあつたのききつはなはつたのききつはな

園中

をせのききつはなはつたのききつはな

二百に花をばらけしに花をばらけしに
とありしは花をばらけしに花をばらけしに
花のやけけししよりありしをばらけしに
ひげあはしむるよりありしをばらけしに
吹のそけけししに花をばらけしに
二百あるの花をばらけしに花をばらけしに
てきつしに花をばらけしに花をばらけしに
見ゆしに花をばらけしに花をばらけしに
花をばらけしに花をばらけしに花をばらけしに

一書をばらけしに花をばらけしに

花をばらけしに花をばらけしに花をばらけしに
花をばらけしに花をばらけしに花をばらけしに
花をばらけしに花をばらけしに花をばらけしに
花をばらけしに花をばらけしに花をばらけしに
花をばらけしに花をばらけしに花をばらけしに
花をばらけしに花をばらけしに花をばらけしに

花をばらけしに花をばらけしに花をばらけしに
花をばらけしに花をばらけしに花をばらけしに
花をばらけしに花をばらけしに花をばらけしに
花をばらけしに花をばらけしに花をばらけしに
花をばらけしに花をばらけしに花をばらけしに
花をばらけしに花をばらけしに花をばらけしに

中

を言ひ花

唐の古牒とてけり花を可枯は信秘と云ふと山あり

張居花

木のりとは藤ねありと云花遊と云ふの事いふを

香花思恋

かゝるの多におもふと云花のいふ事かゝるの事

香花懐舊

我々の花やあつてもあはれいふ事や昔の事花ありた

寧ろ花人花

今世に何と云ふ事いふの妙なり花を古くいふ事

口日杜宇唱食すり

花感

と云言若し春夜梅初来のまに梅らん花を思

思恋

ありしを胸のうらみあるは思ふ事いふ事いふ事

天教

そとに云ふはの事いふ事いふ事いふ事いふ事

しん美くの日影よしのゆや那の善れ等と

春の家

浦らもやまの山祿の春梅らうとわあまもまれん

十二日交還親志家ようとあてあうらう

しひよ後ろくうとあしゆに

山初夢

おとあ(田)のあまやまのあまのうとてりん

造(田)妻のいそまゆとあひまのあひ

てく録あり

春時雨

枕よりあまそやまの人の福あめ福のうとん

稀逢志

あめしの昔の秋とて中あうてあふあうらうと

石水露

和れ浦の我を露のとし秋をまきのれあを松け

十日細川に流さね人のあま後ろあまうと

庭知去

わけ不の庭しまにあまのあまをかうらう時の務せ

恋波

紅いゆき海のほりゆくも海の色はなれそらうか

霧中憶部

見よしつ思のまをそれをなよ又つるその下れ故に

十二日お初寺位物 高舞 修理をまかりし

一續ありし中

梅香留袖

梅の花も難波のおまをそれをなれ神も由浦の路

春慶恋

流るるに花のらうれぬのちを乃山をそをといひ

山家

うやうや今このふの松の風うまを感り信をよ

十八日修理をまのあし後介りて中をそに

園改修

すふ山家のあれしとてや中園に山か方の藤人

恨身恋

いふらやあまのあまを神の信をいふそをそに

谷松

鵜飼急

人かきし袖のしぐさと巾着をぬく風よじつとあ

春雪消

あま

も常より日影となまらる君は霧のしりりる庭のまらま

寄河急

朽より若れく川のまらりく流つるのまらまら

旅宿

ふ浪の初うじし流るる後の思をたつるまらま

大正日君徳院のそり今

帷が急

夕暮のまゆみ水よあく帷せよけぬぬあまらま

残春急

二月山のりろれいとあまらまらまらまらまらま

霧中急

あにそあまらまらまらまらまらまらまらまらま

大冒細川右衛門守 勝元 嵐の月夜よ

あ春天

あの日もいらいのそらまらまらまらまらまらまらま

更衣

定務のうらみしるしをいそいでしうらみよまゝせう物と

秋田

しるふ物あはしく秋田のうらみしるしをいそいで

る意

さうりかしのうらみしるしをいそいでしるふ物あはしく

秋田

しるふ物あはしく秋田のうらみしるしをいそいで

未だ七日お津島知てい橋社素あつきごう趣

九六日平島傍あまの月次

田代

かりらて田代の教とあはしく氷のうらみしるしをいそいで

春不道

きりらて田代の教とあはしく氷のうらみしるしをいそいで

秋田

きりらて田代の教とあはしく氷のうらみしるしをいそいで

秋田

きりらて田代の教とあはしく氷のうらみしるしをいそいで

名は川あつて道しほにせしむのたのむのたのむ

神祇

まふもあつてまふもあつてまふもあつて

七日右馬乃のあつてはあつてあつて

を山花

祇あつてあつてあつてあつてあつて

竹路市

あつてあつてあつてあつてあつて

九日右馬乃の家にてあつてあつて

あつてあつて

三春

あつてあつてあつてあつてあつて

難歌

あつてあつてあつてあつてあつて

を山花

あつてあつてあつてあつてあつて

情月

あつてあつてあつてあつてあつて

松名

楓をそぐ物より冬にゆえより室の松よ六の物花

寄月恋

もふあしをよめより風のそよぶより月のあま

又野

よふまのよ田畑とまらうふ家の芝生に花石をのた

迷懐

をそぐぬいそく人海をよけ花信のちよりのほ

十八日多原 久がきこして一環あをりしに

林早夜

福ようろちのめとせそもほの林のまけりるは

物舟廻信

わらえ昔よあらし福の信よあらし大のけ

恨恋

をそぐぬいそくの森をよ花と秋のゆりそよ

春の園路

よふの都のぬいしらそく花せよよの森人をり

春日早夜月の次

舟路卯花

早川もろもろ舟に居るうらふ白きやうけ卯花
高き郭云

可くしほしほ孫あのかうに御あやまらふ心可き
古寺強月

寸草もあつたの種をまきあつた寺は月をかき
雫花似雲 高丸

長空の青みかきあつてまをせむ花乃の
寄書意

紅の波とくちてすり星の夕とやうに水堂の流

白鷺鳴鳥

あつた山と水とと鳴いとうあつたあつた

あつた白鷺鳴鳥の音も

雪外郭云

をらうあつたあつたあつたあつたあつたあつた

五月五日

天の空とあつた水鏡の二枚とあつたあつたあつた

舟中限日

を世よりふかき信らんゆつらるるのよふ里らそ

十日平 北濱 もとよりしもの中よ

郭么遍

里の世に終るまのなまらんもまらるるまの何なる

霧中

まらんものさうり此神といふ年一六のみらの旅人

懐舊懐

せくも平に在る候まのしきまいく年のをちて初

八月に日右京吏の家れ月見よ

夕暮

人のせらり空をまひまひまひりてやまはる

短夜月

うまひまうかうかしの短く来と月をそいじりり

虫浪志

うかまゆいんそ袖よそゆらぬ浪のまいまきさうせ

深草院

いし移人定らるるに灯のみかかりても夜のそ

五日経理吏の家れ月見よ

宮清

夕子にけりて家二月のまじやけりあまのたのむ

稻川

鳥の若と若もうい玉の毛をわすらすくは流し

顔そ

ふももきい峰の鳥のまじやけりあまのたのむ

夕春面

あま

まじやけりて家二月のまじやけりあまのたのむ

曉部

朝のまじやけりて家二月のまじやけりあまのたのむ

見妻恋

月よそつあじよの妻の石をたのむてゆき

張の日記

あまそつあじよの妻の石をたのむてゆき

八日あまのまじやけりて家二月のまじやけりあまのたのむ

有妻部

あまそつあじよの妻の石をたのむてゆき

寄風恋

人の吹あつぬそのまのまのしに病ふ多き本少く似ぬ

海燈

けはては浪のしほをみしんうきうきうみれぬ

ま音平 抄 すくめて後方より音のありに

林間松

かりに林のしほのありをばゆきよらあゆみか

東ま後

うき草の後川糸より糸のほにほ葉まよふ秋凡

赤布忘

いそそきそのまを長ねこまゆの胸の中はのこりぬ

九月茶屋の月次

早苗

早苗の仕方は人まろしきふお音うらなふまをせぬ

大目

かりのありそんごしれおまてをみてわしは月毎のう

誓の徳

おとよしたまを清そよまをいんのちひのほろくかみ

落花

あな

かき集の梅らさの母はゆふ昆そやむ時とる月

をさ

長めし初め系れ弟才もたすれしききくたのま

の状

球をうり月飛るひきもあれおれと人のまを

田里

うらのんふんをさそて教をしひらさ日の花は

か台是他院のうり合

桐凡

人かぬ考のそりひいた神の音そらりせのま

鶴京

りふらまあやの母のふ考よ初人けやま海をん

善山

思ひ人のまとくねをささうあやういふこうそ

大六日平信 ぬ考の月

雨後 瞿麥

うらのれきての花のうそまをそてあれむ梅よの花

さうり 鶴京

水くみのうらたせよとれ雲のあひくさくしつねとて花とあそぶ
孫月歌園

あはれやと夜の日たをわらふさうくしあつせいの藤人

橋西局 苗名

唐をゆふとくしとらうく此橋よりほしよまふくね

候ふき

花のみくしあく菊の流るる流るる流るる流るる流るる

芳橋急

くねとつしとくねをの山橋よりくらの流るる

橋藤屋

柳本川藤藤のよし軍あつて招きくつねを合とせう

六月四日右京左衛門のあはれ月よ

霧中書屋

春をねてやにあつたものよれいあつた流るる流るる

寄秋草急

あつたふれのおまはれ花をみよとくやあつた流るるの又とせ

志あ裁竹

又そのけとれくえんあつたあつたあつたあつたあつた

十三日平 秋實 すく〜 續文〜

暮雨

ふら〜 庭の〜 草の〜 花の〜 海に〜 露を〜

文

ふら〜 庭の〜 草の〜 花の〜 海に〜 露を〜

暮竹

宵の〜 文の〜 暮の〜 竹の〜 花の〜 園を〜 涼〜 ぬら〜

暮竹

夕の〜 文の〜 暮の〜 竹の〜 花の〜 園を〜 涼〜 ぬら〜

夕日暮るる月夜よ

水上亭

ふ鳥の〜 岸の〜 暮の〜 夕の〜 花の〜 園を〜 涼〜 ぬら〜

晚風涼

ふら〜 庭の〜 草の〜 花の〜 海に〜 露を〜

幽籠芸

日暮〜 夕の〜 暮の〜 竹の〜 花の〜 園を〜 涼〜 ぬら〜

卯花

南風

夕の〜 文の〜 暮の〜 竹の〜 花の〜 園を〜 涼〜 ぬら〜

宇下鶴巻

名もいまだよもあしる大車もあつたしつらも福もあつた
日守 短夢又

あつた東のうもきまのまにいさむらとたうらうと
七二日也 西院のやう

遠夕立

夜もくつたまにし流たうのうとくう川とらふ
国守扇

あまの月れゆるうまの扇をまろ福やのし

小造物

あまの世もいさむらとくお植やまのむりよ竹あつた
七月宵右多事又のあつた

枯田

あまの世もいさむらとくお植やまのむりよ竹あつた
別 今書表

あまの神いさむらとくお植やまのむりよ竹あつた
浦松風

あまの世もいさむらとくお植やまのむりよ竹あつた

月一日在鳥羽の家より一泊ありて

水色初秋

夕のいろもやうに川面の紅葉をまわす舟ありて

亭秋地色

舟を秋の色もよそは船は舟のまはる舟

林懐旧

舟を舟のまはる舟は舟のまはる舟

七日渡河舟のまはる舟のまはる舟

七夕契

舟を舟のまはる舟は舟のまはる舟

舟丁遊意

舟を舟のまはる舟は舟のまはる舟

舟中舵

舟を舟のまはる舟は舟のまはる舟

遠村竹

舟を舟のまはる舟は舟のまはる舟

十日東京府の月次

早秋

ひろき世の本れととんし葉つあしらうそ秋の物を

田家原

床とこしあちまたぬきあつた田うらぬの腰

孝林兼意

昔しあつた常の常の秋の月ひけきやん

養道枕

ふと秋の原うらふあつたや秋のまに養なみ

絶意

ふゆのあつたのこらあつたをこらあつた

涸水

吾月のあつたあつたあつたあつた

大百と徳女の家は後あつたあつた

初春書

ふゆのあつたあつたあつたあつたあつた

河原

ふゆのあつたあつたあつたあつたあつた

秋社

る海の秋のあつたあつたあつたあつたあつた

八月廿日右宮中よりあり月次

上弦月

海老の月のひらき様うへえはるは風

終初月

くし敷とわしとそん思ふは月と國長よあふ

月似心

ふまのりつしとわうとれん上るを月のみあふ

七日西園院の祈念

舊風

七月

太山はあつたも秋風のよきうふすき秋風

秋ノ

うらほのきくも秋風のよきうふすき秋風のよ

秋ノ

ものあつたも秋風のよきうふすき秋風のよ

十日山若大苑大佑 元朝 兼為にきたり

初秋風

天しむくも玉取のよきうふすき秋風のよ

秋ノ

吹さらし風あるやうにふるも ちわけらるゝの草と

日影を

玉の影にいとけ馬牛とし 影をききとあぬは

十の月夜理を更の夜の月次

曉庭虫

平とくして庭の蓬とねよとや 蒼啼声のこゝろ

月夜意

ふのくまはあふらうとくして 入口よあふる影

霧張を

あうつゝとさよの 影をたれお影を 唐の月

来月

高夜

ゆらそ人の光とくたよの 山あおるに白ふゆを

月下影

月影をまよよしわらわらる 月あつゝ家の影を

日影を

様さきよと山の月影をよよけ 何處から推の声

山家月

後とあふらうとくして 影をたれお影を 唐の月

大正四年十月十日

新風

昔の葉の風は秋よ吹きて日ごとく秋の聲をきか

秋風

りてぬは葉の落ちけいりて思ふは秋の聲をきか

秋風

とてふ葉の風は秋よ吹きて日ごとく秋の聲をきか

秋田

鳥をこぼれ葉をこぼれけいりて思ふは秋の聲をきか

紅葉

名風は秋の聲をきか

蒲志

人かたは秋の聲をきか

秋

人かたは秋の聲をきか

秋の聲をきか

百首尚名あはれ

立春風

清らき水は月夜のとほしはなほあつたをききし
月夜記

月夜記

月夜記

川をぬきわたりてわたりてわたりてわたりて

昔山鹿

をの毛のほのかに甲斐の山をよそよそと

月似氷

まの海を月を氷とよそよそとわたりて

月似氷

お里のこぼれ雪のころりしあふみは

月似氷

くたはししとわたりてわたりてわたりて

月似氷

おたきしよつとわたりてわたりてわたりて

廿七日無月院の音介

月似氷

霧の葉とわたりてわたりてわたりて

まのちの江門の氷よあつたまゝとあつてくさつたまゝに
同日八幡の傍とらふ所の隙子より八束の奇
とてすゝめしつゝ

江門書

まのちの江門の氷よあつたまゝとあつてくさつたまゝに
同日八幡の傍とらふ所の隙子より八束の奇
とてすゝめしつゝ
今日そらまゝもあつたまゝとあつてくさつたまゝに
今日そらまゝもあつたまゝとあつてくさつたまゝに

海より各の風波がくさつたまゝとあつてくさつたまゝに
今日そらまゝもあつたまゝとあつてくさつたまゝに

海月

海より各の風波がくさつたまゝとあつてくさつたまゝに
今日そらまゝもあつたまゝとあつてくさつたまゝに

寄秋藤志

海より各の風波がくさつたまゝとあつてくさつたまゝに
今日そらまゝもあつたまゝとあつてくさつたまゝに

海の花

海より各の風波がくさつたまゝとあつてくさつたまゝに
今日そらまゝもあつたまゝとあつてくさつたまゝに

十三平年 秋濱 平首冠下らるゝ何事か
みらり詠すくさ由ありしは即ちく後
てせし作ら

月前月

こゝ世にひらくそ新若はるる月らわ風光も
大日平居の月次くあゝあをせとん
すめしからるゝこゝとこゝと何事か

霧海山集

秋心のはるる霧れは海よありあきと雲がたけ

野草欲枯

又やまへしや 虫の神と志の雲霧れあは秋葉に
あはれ人恋

恨まかりあまのさそとらほはみほあつし沖白浜

秋田

あき

田中ありあはるる秋のちうのこゝと座よとらうあ
声

秋見恋

あつらう秋のあやいしはま葉よ月影のこゝろあ

秋述懐

河内守の事... 秋のや内よあふの...
大之百... 須保申... 小田...
よ... 代... 安... 諸... 判...
他... 多... 申... あり...
て... 中... に

霞春衣

川社七日... 古御...
中... 任... 人... 城... 心... を... 落... ち... 下... 馬... の...
古御

非葉

白木の袖... 松作...
能... 事... 老... 事... あり... 生... の... 座... 此... 松... あり... 根... あり...
十月五日... 松... あり... 根... あり...
又... あり... 根... あり...
松作

初付

初月... 初付

うらとせねとあやふしに園のわんごうりりちねえのて

木枯 苗名

いひあつたまゝのてん百葉のまうちまゆ木枯のを

別名

衣いれをのまゝさふくしねのくまねんまゝ

古柳

うらうちをひつるりりあふまねあねあせね物

木目草の居の月吹りあうりりあせり

昔名

初月と山雲白き鶴のこしすもあうり輝の村

海干鳥

漆そのこいのあひくよあせしをまじりまの村名

若下布

うらとせもかへんあせね佐の漢乃市場の松乃あひ

高菜花風

まの花風あひのまゝあひしひあつせにちりりあ

雪中燈火

まゝとせりりあひのまの白原もあせんあせりりあ

社名

住吉の松の林のあまのたけのこ

社名

鳳鳴のまのこほやまのこ

社名

まのこ社のまのこ社

社名

松のまのこ社

十一月二日或とありて一續ある

社名

焼とてそ社の焼うまそ

社名

おそに去年の社

社名

この社の親のまのこ

社名

この社のまのこ

社名

この社のまのこ

月と星のこゝろをさるる時々のぬれは世のねをぬめ
昔修理太史の家より月夜

冬月

秋は月のおもひと秋のひかりのさしつゝの腰

水と雪

あまのいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも

春恋

うらもねよふかろのほつとぬれはるのささの園

細代

苗名

川をに秋細代をうらぬれはるのささの園

春言

うらひをいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも

水

馬交うらぬ中もいづれもいづれもいづれもいづれも

十二日或ふてはるちをうら

春

おとよしのほろけのささのぬれはるのささの園

恒高

原よしは若く名のうらたむまにたつたのまら

池氷

まがしゑの讀の池氷一書らりりかむらふは

題意

あはしゑの讀の池氷一書らりりかむらふは

海路

あはしゑの讀の池氷一書らりりかむらふは

十三日平

夕暮集

月夜集此日暮迄とて夕霧あつて夕暮集あ

向煙火

ふありてとつてあはしゑのまにまのま

忠告意

あはしゑのまにまのまにまのまにまのま

藤常院

あはしゑのまにまのまにまのまにまのま

十日日忠告院并合

中松

十月

毎日の力とくしとくをいひんぬかをしその山の本松
を草

丁め候とまよとすゆの久松院に流るる鳥の松の下風

東院

かぐれいづめくあまゆりん破れあまのりふ系灯

大能普庫の 教母元法アサ楠七年忌と

らひ小一陰とすくちまうしと

初冬

法もろふととびて七年の暮り流るる冬にけり

初雪

今朝もよりのあまのりまらそとあまのりふの飛と

尺教

さうりともましくはの鹿れねつる物と名れ初花

古日菜店乃月一

氷閉細流

川流あそりる谷はやうひる中一草とみりて

雪中抱負

雪もちる雪のれありの物けきとあててまら東

恨不言恋

うらみあはれをわらふはとくはあはれをわらふはとくは

梅花

梅花

木のけしきに袖のけしきをよみかへてはるかに春風の

深名

くさくさしつらう松のぼけをよみかへてはるかに春風の

念恋

あはれをわらふはとくはあはれをわらふはとくは

天教

あはれをわらふはとくはあはれをわらふはとくは

木三首 皇極院の介人 又は春のよめ

あはれをわらふはとくはあはれをわらふはとくは

年中書

あはれをわらふはとくはあはれをわらふはとくは

袖水京東

あはれをわらふはとくはあはれをわらふはとくは

為言

あはれをわらふはとくはあはれをわらふはとくは

香紙を

いじりよりの多しうらたんが里のふり香紙物風

炭竈香

うらたん屋をくふり夕糖のり焚い香紙よこそ

社乃香

任者の二のうたぬことめ合の松をかえ香紙の

五男こ八旬と齡みちうしおむ正座よす

付よし香紙一同流りよふる為竟^{意入}を長恨

よ交りり流中乃所おぬぬけよて五子細ん

とめ向讓よ平しつ首の懐御あはせしと

お頭娘の八日梅待あり

庭松年久

とつらる庭のうらたんの葉のなみ松えいおらぬり

香春衣 香紙

まじりしもの山姥の香紙の香紙の香紙の香紙の香紙

山紙

竹駒のあしものうらたん紙のあしものうらたん紙のあしものうらたん紙

香紙を

雪の及よこぬ花きく山とくけ日影のころあまふと

雪定竹

松とまよわあも雪よけを寒竹のこれあ

十二首右雪陽花東局よあらうう流ひ流

流あわらうーゆひ

冬初風

雪のあまよせうらそらあおのじやよのころあまふと

冬見歎

あまのりともじうあまをう下れあまのこころあまふと

冬強音

雪のあまよせうらそらあおのじやよのころあまふと

十四日忠臣院秋合ふ

歳言松

雪は流けあつその松の葉こころ月日はあまふと

秋見恋

あまのりともじうあまをう下れあまのこころあまふと

澤色病

あまのりともじうあまをう下れあまのこころあまふと

新蓬窓

秋をくまらぬかきと海をまて袖に付ぬりぬるあ
のけり市

あきとともくかかしてけり方のやとらまはれぬ市
六二日或ふして一續あつらひ

将場官

今世のよきい處をそ若き者のり教あつる言れいよと
軍書月

新らも来とふけりけり年のなほくもはれぬ人

海邊松

さつづ縁とつゞきりふたれえりまのりけり浦松
常盤木君

二葉の花袖とさく言にそのまをまのりけり
歳書一灰毫

うはれまのりひととれまをて居るけりよとて事
空後夏窓

東のそよよしたるぬきとのまのりけり守床の秋風

風破縁夏

を海より夏の風吹くもわすれぬと海を渡る
大音堂よりくまの海を渡る

舟代

里れをくまの海を渡る

見急

を海よりくまの海を渡る

海路

この糸今船通風よあかして海を渡る

古柳

を海よりくまの海を渡る

大八日経理を渡りあかして海を渡る

その中へ

遠山庭

を海よりくまの海を渡る

老情花

を海よりくまの海を渡る

五月五

を海よりくまの海を渡る

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written on aged paper. The text is oriented vertically and appears to be a formal or official communication. The characters are densely packed and difficult to read due to the cursive style and fading.



